

詩好の王様と棒縛の旅人

三遊亭円朝

青空文庫

昔時むかしシ、リーといふ島のダイオインシアスといふ国こく王わうがござ
 いました。此このの王このが好んで詩を作りますが、俗ぞくにいふ下手へたの横好よこごず
 きで、一向上かうじやうず手でございませぬ。けれども自分では大層上たいそうじやう
ず手なつもりで、自慢じまんをして家来けらいに見せますると、国王こくわうのいふ
 事だから、家来けらいが決して背そむきませんで、「どうも誠に斯かやう様な御ごめい
 名作なざくは出来できませぬもので、実じつに御名作ごめいざくで、天下てんかに斯かやう様なお作ざく
 は沢山たくさんにございますまい。などゝいふから、益々ますます国王こくわうは得と
 意くいになられまして、天下てんか広ひろしと雖いへども、乃公おれほどの名めい人じんはある
 まい、と思つてお在いでになりました。処ところが或時あるときの事でシ、リーの
 内うちで、第一番だいばんの学がく者しやといふ、シロクシナスといふお精しやうりやう靈うさ

様まの茄子なすのやうな人が参まゐりまして、王わうにお目通めどほりを願ねがひますると、早速さつそくわう王は御自分ごじぶんの作つくつた詩を見せたいと思おぼ召しめしたから、王「これ、シロクシナス、是これはな、予よの近きん作さくで、一詩し作つくつたから見て呉くれる。シ「は、ツ。国王こくわうの作つくつた詩といふから、結けつ構うな物だらうと存ぞんじて、手に取り上げますると、王「どうぢやな、自製じせいであるが、巧うまいか拙まづいか、遠慮ゑんりよなしに申まうせ。シ「は、ツ。とよくよく目を注つけて見ると、詩などは円朝ゐんたくしは解わかりませぬが、韻みんをふむとか、平ひやう仄そくが合あふとかいひますが、全まるで違ちがつて居をりました詩にも何なんにもなつて居をりません。シロクシナスは正しやう直ぢきの人だから、シ「へえ、お言葉ではございますが、拙まづい巧うまいと申まうすは二の段だんにいたしまして、是これは第一に詩といふものになつ

て居をりません、御承知ごしようちの通りとほ、詩まうと申まうしまするものは、必まらず
 韻みんをふまなければならず、又また平ひやうそく仄あが合あひまあせんければなりま
 せん、どうも斯かやう様なものを詩まうだといつてお持ち遊あそばすと、上かみの御ご
 恥ちじよく辱あひなに相成あひなります事まうゆるあひに、是これはお留とゞまり遊あそばした方ほうが宜よろしう
 ございませう。と申まう上あげると、国こくわう王まつか真赤まつかになつて怒いかり、王
 「是これは怪けしからん、無礼ぶれいしごく至極やくの奴なんだ、何なんと心こゝろえ得をて居をる、是これほど
 の名めい作さくの詩しを、詩しになつて居をらんとは案あんぐわい外がいの何どうも失しつ敬けい
 な事まうを申やつす奴やつだ、其そのぶん分ぶんには捨すてお置おかん、入じゆらう牢まうしつ申まうしつ附つける。さア
 どうも入じゆらう牢おほ仰おほせ附つけられて見みると、仕しかた方たがないから謹つしんで牢ら
 舎うしやの住すま居ゐをいたして居をりますと、王わうもお考くわへになつて、ア、氣
 の毒どくな事ことをいたした、さしたる罪つみはない、一時じの怒いかりに任まかして、

シロクシナスを牢舎らうやに入れたのは、我が誤り、第一国内こくないで一等とうの学者がくしゃといふ立派りつぱの人物を押しこおしこめて置くといふは悪かつた、とお心こころづ附つきになりましたから、早速さつそくシロクシナスを許ゆるして、御ご陪食ばいしょくを仰おほせ付けつになりました。王わうの前に出でまして、シ「囚はからず放免はうめんを仰おほせ付つけられ、身みに取りまして大慶たいけい至極しごく、誠まことに先さき頃ころは御無礼ごぶれいの段々だん／＼、御立腹ごりつぶくの御様子ごやうすで。王「イヤ先せん日じつは癩かんが起たつて居をつた処ところへ、其方そのほうが逆さからつたものだから、詰つまらん事を申まうして氣きの毒どくに心得こころえ、出しゆ牢らうをさした、其方そのほうが入牢じゆうらう中ちゆうに一詩し作しつたから見て呉くれ。シ「はゝツ。シロクシナス番兵ばんべいを見返みかへりまして、王わうの詩を手に取り上げ、シ「御急作ごききさくでございいますか。王「左様さやうぢや。シ「へーツ。と見て居ゐる内うちに、渋しぶい苦にがいやうな顔

をして、シ「番兵殿、手前をもう一度牢へお連れ戻しを願ひま

す。——余程不作と見えます。夫に似たお話がございます。

これは日本の事で、或旅僧が峠を越えて来ますと、寒風が烈

しくフーフーツ吹捲りますので堪り兼ねて杉酒屋といつて、

軒の下に杉を丸く作つて、出してあります居酒屋へ飛込んで、

僧「御亭主や。亭「はい、お掛けなさいまし。僧「余り寒いか

ら一杯付けてお呉れ。亭「工畏こまりました、此方へお掛けなさ

いまし。僧「一寸小便に行きたいが、何処か用を足す処はある

まいか。亭「裏の畑に担桶が並んで居ますから、夫へなさいまし。

僧「さうかい、……おゝ寒い。裏の田圃へ出て見ると奥の方の物

置きの中に素裸体で年の頃三十二三になる男が棒縛りになつ

て居ゐるのを見て、和をしやう尚おどは驚おどろき、中なかへ飛とび込んで来きて、僧ごてい「御ご亭しゆ主しゆく。亭しゆ「へエく。僧ごてい「アノ何なにか素すつ裸ば体だかで物置ものきの中ちゆうに棒ぼう縛しりになつて居ゐるものがあるが、あれは何なんだね。亭しゆ「あれは何なんで、旅たび人びとでございませう。僧ごてい「何を悪い事なにをしたのだえ。亭しゆ「エ、悪い事なにをしたものではございませうがね、私わたしの家うちへ来きて、酒さけを一杯ぱい出だせといふゆゑ、一合がふつ附つけて出だしますると、湯ゆ呑のみで半分はんぶんも飲のまない内うちに、渋しぶい面つらをして、是これまでこに斯こんな渋しぶい酒さけは飲のんだ事ことがないといひましたから、夫それを又また他わきへ行いつて云いはれるとね、私わたしのところところ商しやう売うばいに障さはるから、他わきへやらねえやうに棒ぼう縛しりにしたんでございませう。僧ごてい「是これは怪けしからん事ことをするものだな、どうか勘か忍にんしてやつて呉くれまいか。亭しゆ「いや勘か忍にん出来できませぬ、彼あれを

助^{たす}けると外^{ほか}へ行^いつて喋^{しゃべ}舌^るるからいけません……お爛^{かん}が附^つきましたよ。僧「ハイく、是^{これ}が猪^{ちよく}口^{かい}、大^{だい}分^ぶ大^{だい}きな物^{もの}だね、ア、宜^いい工^ぐ合^{あひ}についたね。グーツと一口^{くちの}飲^のむか飲^のまん内^{うち}に旅^{たび}僧^{そう}が洩^しい顔^がして、僧「アツ……御^ご亭^{てい}主^{しゆ}、序^{ついで}に愚^ぐ僧^{そう}も縛^{しば}つてお呉^くれ。

青空文庫情報

底本：「明治の文学 第3巻 三遊亭円朝」筑摩書房

2001（平成13）年8月25日初版第1刷発行

底本の親本：「定本 円朝全集 巻の13」世界文庫

1964（昭和39）年6月発行

入力：門田裕志

校正：noriko saito

2009年6月19日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

w.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

詩好の王様と棒縛の旅人

三遊亭円朝

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>